

氏 名	吉 野 絹 子		
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 4526 号		
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者		
学 位 論 文 名	対人的葛藤の社会心理学的研究		
論文審査委員	主 査 教 授 金 児 暁 嗣	副主査 教 授 伊 藤 正 人	
	副主査 教 授 森 田 洋 司		

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、身近な人との関わりの中で発生する対人的葛藤に問題を絞って、葛藤現象の諸側面を実証的に検討し、「対人的葛藤のマネジメント・モデル」を提唱した。

まず、第 1 章では本論文で取り扱う葛藤の概念を規定し、葛藤の構成要件、時間的経緯における位相を説明した。さらに葛藤の理論および葛藤研究の方法論を紹介し、最後に、本論文の全体構成について述べた。第 2 章では、葛藤のポテンシャルティともいべき対人ストレスをそのコーピング（対処行動）との関係で検討した。少年鑑別所に入所した非行少年と一般の中学生・高校生・大学生を対象に調査を行い、そのメカニズムを「対人ストレス・ストレスコーピング 2 段階モデル」を構成して明らかにした。続いて第 3 章では、主婦を対象に日常場面における対人的葛藤を、葛藤の認知から具体的な解決策に至るプロセスと捉えて分析した。その結果、葛藤解決パターンに 3 類型（強硬型、柔軟型、放置型）があり、葛藤解決パターンを規定するのは葛藤状況の「重要さの認知」であることが見出された。次いで第 4 章では、当事者間で葛藤解決の見込みが立たない場合の、第三者介入の機能と効用について、大学生を対象に検討を加えた。第三者の効用を因子分析した結果、「葛藤解決促進因子」「知識獲得因子」「自己主張因子」「交渉回避因子」の 4 因子が抽出された。第 5 章では、地震災害時の市民同士や市民と行政間の葛藤を取り上げ、数量化 Ⅱ 類によって分析した。その結果、中・高齢層に比べて若年層は利己的な態度が強いこと、市民と行政職員の間には、「個人財産」に対する認識と、危機状況下の「合理性」のとらえ方に差が見られた。第 6 章では、葛藤のプラス面とマイナス面を検討し、葛藤の存在を許容されることが集団に変化と活力を与え、さらにその発展に寄与するという大きなプラス面があることを示した。さらに葛藤を有効に機能させる社会的スキルについて検討し、適切な自己調整能力と対人接触のスキルを身につけることが、われわれのより豊かな成長にとって大切な課題だと考えられた。

最後に、本論文で提起した「対人的葛藤のマネジメント・モデル」は葛藤を一連のサイクルの中で大局的に捉え直そうとする発想のもとに行われ、言葉を換えると、葛藤研究を「閉じた系」の中から「開いた系」に開放しようという提唱であり、このような視点が今後の葛藤研究を深めるために重要だと結論づけた。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

S.フロイトの精神分析学に始まり、後に心理学の分野で K.レヴィンや N.E.ミラーが発展させた葛藤理論は、個人内での心理的葛藤を扱ったものであるが、それとは区別して、複数の個人や集団、あるいは組織や国家の間で目標が対立するために生じる緊張状態を社会的葛藤と呼んでいる。

本論文は、社会的葛藤のうち、主として対人的葛藤（以下、場合によっては葛藤と略す）を問題として、その諸相を実証的に明らかにし、論者独自のマネジメント・モデルを提唱しようとしたもので、6 つの章より構成されている。

以下に、各章の論旨の展開に沿って論評を加える。

第1章「序論」では、対人的葛藤の暫定的な概念定義が行われたのち、葛藤の諸相について詳述され、さらに、心理的葛藤から対人的葛藤に至るまでの諸理論が鳥瞰されている。そのうえで、葛藤のマネジメント・モデルが提唱され、論者による2章以降の実証的研究がそのモデルの中に位置づけられている。マネジメント・モデルとは、葛藤の全過程を、葛藤の予見　事前対応　葛藤の認知　葛藤への認知的対応　葛藤への行動的対応　次の葛藤への備え　葛藤の予見というように、一つのサイクルとして表現したものである。このモデル自体の斬新性は高く評価できるが、モデル構築にいたった経緯の説明と理論的枠組みが望まれるところである。

第2章「ストレスと対人的葛藤」は、非行少年と一般の中学・高校・大学生を対象として、対人的ストレスとそのコーピングとの関係を明らかにしようとしたものである。モデルとの関係では、「事前対応　葛藤の認知」に相当する部分が扱われている。かつて少年鑑別所に勤務していた体験を十分に活かした論者ならではの研究計画のもとに、きめ細かい分析がなされ、非行少年の攻撃性が自尊心の損傷と攻撃性抑制力の欠如によるものであることを実証した功績は大きく、向後の青少年の教育にも資するところ大であると思われる。この研究結果の信頼性を高めるためにも、審判終了後のデータを収集する作業を期待したい。

第3章「対人的葛藤とその解決過程」では、奄美と東京に住む主婦を対象に、日常場面における対人的葛藤が取り上げられ、モデルの「葛藤の認知　葛藤への認知的対応」の部分が検討されている。本章の成果は、葛藤の重要さの認知、相手との心理的距離、および責任の所在の明確さが葛藤解決のパターンを規定することを明らかにしたことであり、モデルの妥当性を裏づけるものとなっている。あえて難点を言えば、サンプリングの方法と論旨の展開にやや難点を指摘することができるが、本章の結論を揺らがせるものではない。

第4章「対人的葛藤における第三者介入の効果」は、モデルの「葛藤への行動的対応」を扱ったものである。第三者（仲裁人）に葛藤解決をゆだね、その第三者による審理や判断によって葛藤や紛争が解決される手続きは、今後わが国でも重要性を増すであろう。しかしながら、第三者介入に関する社会心理学的研究は日本ではほとんどなされておらず、とくに私的な第三者（友人、上司など）の介入に関する研究は皆無に近い状況にある。論者はこの未開拓の領域に果敢に挑戦し、第三者介入の効果や第三者介入が機能する状況要因を数量的に明らかにした。この点に大きな意義を認めることができる。ただ、シナリオ法を用いて第三者介入の促進要因を検討しているが、回答者の実体験と仮想現実とが混在しており、これを識別した分析が施されるべきであったと思われる。

第5章「地震災害時における対人的葛藤」では、モデルの「葛藤への行動的対応　次の葛藤への備え」の部分が検討されている。本章では、阪神淡路大震災の教訓を踏まえ、事前に地震災害等に対する市民同士や市民と行政の意識の差異を把握し、両者の対立の防止対策を立てておくことが、危機管理の面からもきわめて重要であるとの観点から実施された調査が分析されている。その意味で本章は、社会問題の解決と社会制御をめざす実践的な研究を志向するものであり、まさにK.レヴィンの提唱したアクション・リサーチに相当する。見出された諸知見は、行政面において十分な実践的意義を有するものと高く評価できる。

最後に第6章「結語」では、まず、葛藤のもつポジティブな機能に目を向けた議論が展開されている。この視点はきわめて重要であり未踏の問題であるが、このことを実証的に検討することが今後の課題とされよう。ついで、これまでの各章の研究成果にもとづき新たに対応への評価と葛藤へのポテンシャルの獲得の2要因を加えて、マネジメント・モデルの改訂版が提示されている。

叙上のとおり、本論文の価値は、実証的な分析手法を用いて多くの個別的な葛藤のメカニズムを明らかにし、マネジメント・モデルに見られる葛藤研究への新たな発想と、そこから今後の葛藤研究の方向性を示した点にある。今後は、論者が現在進行中の模擬社会ゲームの研究をこのモデルに組み込み、葛藤当事者の「自己像」もあわせて解明できれば、さらに深い研究の展開が期待されるであろう。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。